臨床の現場から

各診療科紹介 56

乳腺外科紹介

―乳がんと遺伝性のがんについて―

外科 顧問　大住 省三

はじめに

2023年4月に赴任してまいりました、大住省三と申します。

私は約30年間四国がんセンターで乳腺外科医として仕事をさせていただきました。今年の３月で四国がんセンターを定年退職となり、４月から松山市民病院で仕事をさせていただくことになりました。趣味は、読書とドライブと英会話（下手ですが）くらいでしょうか。家族からは、「無趣味な人間」と言われています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

治療法の変化

私は今までに個人的には3,000人以上の乳がん患者さんの治療を行ってまいりました。約30年間乳がんに関わってきて、その間に治療法が大きく変わりました。手術で言うと、以前は乳がんに罹れば、乳房を切除するしか手術方法はなかったのですが、現在では、乳房を残すのが普通になってきました。わきの下のリンパ節も、以前は乳がんと診断されたらすべて取るのが普通でしたが、現在では、リンパ節の一部のみ切除することのほうがずっと多くなりました。

また、最近では各がんの薬物療法が大きく変わりました。多くの新しい治療薬が使えるようになり、毎年のように標準的な薬物療法の内容が変わっています。すなわち、毎年のようにがんの治療成績が良くなっているのです。

そのため、各がんの専門医でなければ、それらの最新の治療には対応できなくなりつつあります。そこで、乳がん検診で異常を指摘されたり、乳房に何か異常がありそうな方は、是非見せていただければありがたいと存じます。

遺伝性のがんについて

遺伝性のがんの専門医として、遺伝性乳がんのみでなく、遺伝性の大腸がんや、遺伝性の婦人科がんの患者さんも診察してきました。

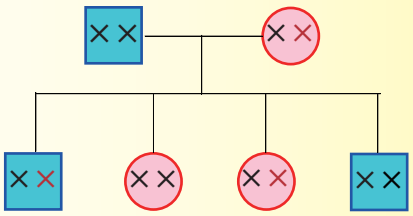
遺伝性のがんかどうかは、診察のみでは診断できないことが多く、血液検査で遺伝子を調べて診断することがほとんどです。

ただ、遺伝性を疑わせるがんの発症の仕方はある程度知られており、その特徴を持つ患者さん方には血液を使って遺伝子を調べることをお勧めしています。

遺伝性腫瘍を疑うべき項目

①ご自身やお子さんを含めてご両親のどちらかの家系に同じがんの人が複数いること
（たとえば、乳がんと卵巣がん、大腸がんと子宮体がんなど）
②一人の人が何度も上記のがんにかかること
③がんに罹患した年齢が若いこと

遺伝性腫瘍はごく一部の例外を除き
常染色体優性（顕性）遺伝します
（子供には性別に関係なく2分の1の確率で遺伝）



×正常な遺伝子　×変化のある遺伝子

遺伝性乳がん卵巣がん症候群

遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）という病気では、この病気でがんに罹られた患者さんにしか効かない薬も見つかっており、HBOCであることがわかると治療の選択肢が増えて、治癒率を高めたり、再発している場合でもそのがんの経過がよくなることが分かっています。

HBOCの方がかかりやすいがんには、乳がん、卵巣がん、前立腺がん、膵臓がんなどが知られています。HBOCの疑いのある乳がんや卵巣がんの患者さんには、保険を使って遺伝子を調べることができます。

HBOCと診断された患者さんの血縁者の中には、同じ遺伝子の変化を有する方がおられることが多く、その方々が女性の場合には非常に高い率で乳がんや卵巣がんに罹ります。そのため、この遺伝子の変化を有する女性の中には、毎年１回乳房のMRIを撮って、非常に早期に乳がんを見つけたり、時には予防的に乳房を切除する方もおられます。

卵巣がんはかかってしまうと非常に経過が悪いため、こちらは遺伝子の変化を持っておられる女性には卵巣の予防的切除を強くお勧めしています。

遺伝性腫瘍の診療の目的

- がんのリスクが非常に高い方々のがんを予防あるいは早期発見してがんで死亡することを防ぐこと
- 治癒が困難な場合は、最も適切な治療をして、長期生存を目指すこと

おわりに

当院では2005年より乳腺専門外来を設立し、病理診断科、放射線科、臨床検査室などと連携し、週3日（月曜日の午前と午後、木曜日の午後、金曜日の午前）診察を行っております。

今後も地域医療に貢献できるよう、乳腺外科チームとして質の高い診察を行っていこうと思います。地域の先生方からのご紹介をお待ちしております。何卒よろしくお願い申し上げます。

お気軽にご相談ください